猫の緑色の虹彩が感情を帯びている。海岸や港には魚を目当ての猫が集まるのである。

野に生まれテレビの上を好みたり押入れに死にし　ジャニス、ジャニスよ　『闇市』　谷岡亜紀

この前夜、作者は歌会の二次会に出席し、そのまま帰宅しなかったとか。ジャニスは寂しかったであろう。

もも色の舌の先端しまい忘る水充分に飲みたる猫の　『形代Ⅲ』　田中多津子

一日の大半は寝ているか、惚けているかなので、時々油断して、こういうことも起こるのである。

猫の子のねむり甘しも夢ひとつのみこんでゐるちひさな喉（のみど）　『眉月集』　本田一弘

幻想的な猫、走っていようが、寝ていようがどこか浮き世離れして、かつ神秘的なのである。

もうこの世になきわが猫が銜へ来し子鼠のうつくしかりし両の眼　『金の雨』　横山未来子

鼠や小鳥を持ち帰るのは、子供に狩りの練習をさせるためだとか。そういう本能が鼠をもたらすのである。鼠ではなく子鼠としたのは猫へのオマージュであろう。

座り猫ふりむくときになにかかう懐手（ふところで）する感じをかもす　『時のめぐりに』　小池光

「ひとしきり水を舐めたる白猫は尾行をさそふごとく去りにき」『日々の思い出』でもそうだが、小池光の描く猫は妙に人間くさい。懐手をするごとし、ではなく「かもす」を使ったところが技巧である。

白黒のクリスマスツリー　白黒のちちははと僕　白黒の三毛　『二丁目通信』　藤島秀憲

色が重要なポイント、そして名詞だけで、写真はモノクロだった時代と家族の歴史を説明してしまっているうまさ。きわめつきは「白黒の三毛」、色の矛盾がユーモアを帯びて、落語で言うところの落ちになっている。

今宵ひそと月と野良猫が登場すわが人生の野外舞台に　『みどりなりけり』　築地正子

築地正子は自分に厳しく、日常や人情に堕することのない人である。人生は舞台、歌もまた舞台、と言いつつ次ぎのような歌も作っている。「行き遇へる仔猫としばし会話せり仔猫はころりと地に寝たりして」築地正子といえども仔猫であればこそ無心になれるのだろう。

橋を来る白猫に会いぬ橋を渡る猫をはじめて見たりと思う　『ムーンウォーク』　佐佐木幸綱

橋を渡る狸を追い抜いたことがある。なので作者の「？」、「！」な気持ちはわかるような気がする。橋は渡りはじめたら逃げ場は無い。動物にとっては大変危険な行動である。しかし電車に乗って往復する猫がいることを藤原新也が『丸亀日記』で報告している。ありうべからざる場面に遭遇したという、おかしいような奥深いような不思議な歌である。